

研究所報

No. 1

発行所

平田篤胤佐藤信淵研究所
秋田市千秋公園 1-16
電話 0188-32-4496

所報発行にあたって

所長 北 嶋 昭

彌高神社は、我が郷土秋田の産める偉人、平田篤胤大人、佐藤信淵大人の二柱の御祭神を奉祀して、明治四二年に創建され、今日に至って居るわけであります。

かつては、両大人に対する一般の関心も極めて強く、且つ、両大人に関する研究も盛んに行なわれ、著書等も多数発刊されるなど一時代を画したわけではありましたが、時が変わりいつしかそのようなものも埃を被り、片角に忘れ去られようとしている感があります。両大人のしるされた偉大な御事跡は、時が変わるうとも、この我が国を今日たらしめている歴史の上に厳然と輝いているのであり、この混

沌とした世情の中に於いては、正に今こそ両大人の御神徳を宏めしめなければならぬと信じる次第であります。

現今は、正に世代交替の時に差し掛かっており、このままでは貴重な資料や、それらを伝聞する機会も失なわれる恐れもあるとの判断から、先ずは両大人を奉祀する当神社に於いて、それらの事どもを調査研究する機関を設けなければならぬと考え、昭和五七年当彌高神社内に平田篤胤、佐藤信淵研究所を設置し、両大人に関わる事どもに關しての調査研究を主体として、資料展示公開、遺蹟地図作成等、教育普及にも傾注いたし

ながら、微力たりとも行つてまいりました。

しかし現実には、いざ取り掛かつてみると、予想はして居つたものの両大人の御事蹟のあまりの偉大さと広大さに、ただただ茫然自失の態でありましたが幸いにも若く熱心な齋藤壽胤専任研究員に恵まれ、彌高神社の笹村良成、谷野茂樹、両権称宜に加えて、熊谷義一氏、桐原善雄氏、川越重昌氏にも調査員としてご協力いただけるとに相なり、ようやくその体なをし活動いたしてまいりました。

特に熊谷氏は、平田篤胤先生とは門人として縁りの深い家柄であり、熊野神社の宮司として、秋田県神社庁庁報編集委員長を務める等、誠に造詣の深い方であります。

桐原氏は、真坂八幡神社宮司として、又先年は『平田篤胤と秋田の門人』という研究冊子を自費出版され、それが外国からも購入申し込みが来る程であり、これまた見識の深い方であります。川越氏は、高梨神社宮司として、又特に佐藤信淵先生に關しては戦前より多数の著書や論文を発表されており、中央の資料等の情報にも明るい方であり現在は、信淵先生の火葉の

研究に打ち込んでおられるものであります。

本研究所の使命である調査研究はもとより教育普及、並びに祭神として神徳昂揚にあたって適任なる人材を得たと考えております。従つてこの三氏には、研究所の活動につきましても、又本誌発行につきましてもいろいろとアドバイスをいただきましたこと、厚く御礼を申し上げたいと存じます。

なにはともあれ、この偉大な先哲の御遺徳を知らしめるためにも、生誕の地、この秋田においてその研究の灯を絶やしてはならないという決意のもと、牛歩の如くではありますが研究を積み重ねてまいりる所存でございます。

本誌はこれらの実績報告の一部として、又研究機関誌としての立場も保持しながら発行を志すものであります。なにとぞ、今後共、各方面の絶大なるご指導、ご教示をお願い申し上げる次第であります。

研究所報

No. 1
発行所

平田篤胤佐藤信淵研究所
秋田市千秋公園 1-16
電話 0188-32 4496

所報発行にあたって

所長 北 嶋 昭

彌高神社は、我が郷土秋田の産める偉人、平田篤胤大人、佐藤信淵大人の二柱の御祭神を奉祀して、明治四二年に創建され、今日に至って居るわけであります。

かつては、両大人に対する一般の関心も極めて強く、且つ、両大人に関する研究も盛んに行なわれ、著書等も多数発刊されるなど一時代を画したわけではありましたが、時が変わりいつしかそのようなものも埃を被り、片角に忘れ去られようとしている感があります。両大人のしるされた偉大な御事跡は、時が変わるうとも、この我が国を今日たらしめている歴史の上に厳然と輝いているのであり、この混

沌とした世情の中に於いては、正に今こそ両大人の御神徳を宏めしめなければならぬと信じる次第であります。

現今は、正に世代交替の時に差し掛かっており、このままでは貴重な資料や、それらを伝聞する機会も失なわれる恐れもあるとの判断から、先ずは両大人を奉祀する当神社に於いて、それらの事どもを調査研究する機関を設けなければならぬと考え、昭和五七年当彌高神社内に平田篤胤、佐藤信淵研究所を設置し、両大人に関わる事どもに關しての調査研究を主体として、資料展示公開、遺蹟地図作成等、教育普及にも傾注いたし

ながら、微力たりとも行っていました。

しかし現実には、いざ取り掛かってみると、予想はして居ったものの両大人の御事蹟のあまりの偉大さと広大さに、ただただ茫然自失の態でありましたが幸いにも若く熱心な齋藤壽胤専任研究員に恵まれ、彌高神社の笹村良成、谷野茂樹、両権称宜に加えて、熊谷義一氏、桐原善雄氏、川越重昌氏にも調査員としてご協力いただけるところに相なり、ようやくその体をした活動いたしてまいりました。

特に熊谷氏は、平田篤胤先生とは門人として縁りの深い家柄であり、熊野神社の宮司として、秋田県神社庁庁報編集委員長を務める等、誠に造詣の深い方であります。

桐原氏は、真坂八幡神社宮司として、又先年は『平田篤胤と秋田の門人』という研究冊子を自費出版され、それが外国からも購入申し込みが来る程であり、これまた見識の深い方であります。川越氏は、高梨神社宮司として、又特に佐藤信淵先生に關しては戦前より多数の著書や論文を発表されており、中央の資料等の情報にも明るい方であり現在は、信淵先生の火葉の

研究に打ち込んでおられるものであります。

本研究所の使命である調査研究はもとより教育普及、並びに祭神として神徳昂揚にあたって適任なる人材を得たと考えております。従ってこの三氏には、研究所の活動につきましても、又本誌発行につきましてもいろいろとアドバイスをいただきましたこと、厚く御礼を申し上げたいと存じます。

なにはともあれ、この偉大な先哲の御遺徳を知らしめるためにも、生誕の地、この秋田においてその研究の灯を絶やしてはならないという決意のもと、牛歩の如くではありますが研究を積み重ねてまいりる所存でございます。

本誌はこれらの実績報告の一部として、又研究機関誌としての立場も保持しながら発行を志すものであります。なにとぞ、今後共、各方面の絶大なるご指導、ご教示をお願い申し上げる次第であります。

研究報文

平田思想の展開における覚書

——秋田県における明治以降の著作物を中心として——

齋藤 壽胤

今日、学問は細分化され多岐に亘っている。専門性の追求はその領域を自ら狭めている感さえある。それらはある一つの範囲の問題解明とはなっても、その周辺はあまり関心がとどかないできたのが筆者の反省でもある。従って、あらゆる方向からその解明につとめるとするならば、隣接諸科学の業績を無視してはならないであろう。

筆者の研究分野の一部である国学者平田篤胤の研究は、その思想・著作・伝記・学問体系・国学・神道・歴史的面など様々な方向から取り組んでいかねばならない立場を有している。例えば、平田篤胤の学問であっても、それは先人の業績をふまえ、またはそれに基づいたもの、新たな資料によることなど、個人思想の展開にあっては後世における評価がどうなされてきたか、等々は思想解明にとつて欠くことの出来ない問題である。

極く卑近な例をとつても、思想家の墓にいたるまで研究対象となり、そのことがある思想の根本理論である場合が生ずることを披見されるのである。

平田篤胤は国学、神道学者として名高い事は言をまたないが、本稿は前述のことを鑑み、手始めとして、「秋田県における平田思想の展開」について、特に明治以降に見られる秋田県関係の著作物から若干の考察を試みたものである。もとより、本稿は篤胤が羽州秋田の出身であるが、生年より二十歳までと、晩年の三カ年ばかりの秋田生活で、あとは江戸であることを十分に考慮の上である。それを敢えて明治以降としたことは、没年（天保一四年）以降明治までの間における思想の影響を無視したものではなく、問題点をしぼり、凡そ書籍著作物の極めて一般化した時期において、その学と思想の

展開が郷土の人々がいかに享受し、とらえたか。精神的な面の一端を知るよすがとするものである。何よりも、秋田において秋田で出来る一歩であろうと考えたからである。

○

先ず初めに篤胤の没後の門人についてふれておく。篤胤の学問と思想は地方神官、郷士、豪農、商人、武士から庶民にいたるまで、門人五五三人、没後の門人一三三〇人余の多きにみる如く、受け入れられていったことはよく知られている。秋田に限らず全国にその学門思想が普及したことは、明治維新の原動力として一つの帰結を見た。後にも少し触れるが、戊辰戦争の結果がそれを明示するものである。

いま『門人姓名録』^{註1}によって没後の門人を、篤胤生国の秋田人と、それを全国の入門者数で対比させてみる。

元号	秋田人 入門者数	全国入 門者数
弘化元年	八人	一一人
二年	一人	三人
三年	一人	三人

嘉永二年	三年	四年	五年	安政二年	三年	四年	五年	六年	萬延二年	文久二年	三年	四年	元治二年	慶応二年	三年	四年	明治二年	三年	四年	五年
一人	二七人	四人	一人	二人	一人	一人	一人	一人	五人	二人	二人	一人	一人	四人	一人	七九人	二七人	八人	二三人	七人
一一人	六五人	二三人	二〇人	二五人	一七人	三八人	二三人	四八人	七〇人	八六人	一六六人	一二六人	一二五人	一四五人	一六九人	二四四人	九六七人	七五七人	四四八人	二二四人
一人	六五人	二三人	二〇人	二五人	一七人	三八人	二三人	四八人	七〇人	八六人	一六六人	一二六人	一二五人	一四五人	一六九人	二四四人	九六七人	七五七人	四四八人	二二四人

これを見ると、慶応四年（明治元年）は他に比して断然と入門者が多い。この年はいわずもがな戊辰戦争の起こった年で、明治改元遷都となった年でもある。

さて、天保一二年に突然の江戸退去命令により生国に退去した篤胤に対して、彼の篤胤の業績とその名声にもかかわらず、幕府の嫌

疑と生国出奔もあり、晩年における佐竹藩の冷遇は、僅か一四人扶持八両というから可成り低いものである。この戊辰戦争において秋田佐竹藩は、奥羽二五藩を敵として孤軍奮闘をし、遂に天朝の大義を得た訳だが、これとても官軍について他藩のように藩主が主体的に勤皇につとめた例とは別で、平田篤胤門の若い人々が仙台藩の使者志茂又左衛門等を刺殺するなどして、決死をもって引導したことが主な因である。このような関わりからも戊辰期が門人の多い理由といえよう。

またそれ以前にも、安政三年には吉川忠行の設立した惟神館（武学講習所）、文久三年には篤胤生家大和田家の記念として雷風義塾を創立し、これらで平田学を根本とした講究がなされていたことを忘れてはなるまい。

明治以降も、その影響は大であったことはこの門人の数を見ても窺うことが出来る。とりもなおさず、没後から明治以前まで温床されてきた平田国学の結実であったともいえよう。秋田県内門人等によってその思想が明治以降にも伝えられていったと考えられる。

- 明治以前における平田思想の方向は斯くの如きであろうが、その後における秋田の展開はどうであったろうか。それを秋田県内刊行物、秋田県関係者著作物、その他秋田県に関わる活字化されたものをひろいあげて見ることにする。
1. 著者関係——秋田県在住者、秋田県出身者による——
- 昭和 『平田篤胤大人』小島好治 人文閣 昭16 143頁 B6
- 『平田篤胤』（偕成社伝記文庫）伊藤永之介 偕成社 昭17 253頁 B6
- 『篤胤大人とその実家大和田家一族——平田篤胤大人百年祭記念掃苔記』川越重昌（掃苔12—8 東京名墓顕彰会 昭18）
- 戦後 「二つの国学関係史料 新野直吉（神道史研究5—3 京都・神道史学会 昭32）『大磐平田篤胤伝（国学研究叢書8）伊藤裕 錦正社 昭48
- 「古史成文」が平田国学の根幹骨髓 伊藤裕（新修平田

篤胤全集第二巻付録 昭52 12頁）

2. 出版 著者関係——秋田県人

- 秋田県内出版及び発行
- 明治 『平田佐藤両大人小伝』秋田県教育会編 秋田・編所 明41 27頁
- 『平田篤胤佐藤信淵両先生小伝』秋田県教育会編 秋田・編所 明42 56頁
- 大正 『平田篤胤先生伝』秋田県教育会編 秋田・石川書店 大14 86頁
- 昭和 『秋田県立秋田図書館蔵平田篤胤先生著書佐藤信淵先生著書根本通明先生遺書目録』秋田県立秋田図書館編 秋田・編所 昭5 97頁 B6
- 『平田篤胤（秋田の土と人）』安藤和風編 昭6
- 『昭和七年九月十一日平田先生九十周年記念秋田県立秋田図書館蔵平田篤胤先生著書目録』秋田県立秋田図書館編 秋田・編所 昭7 8頁
- 『偉人平田篤胤』佐々木三治郎（羽城秋田62号 昭7）
- 平田先生の奥墓 和田喜八郎（玖瑰4—5 秋田・玖瑰社 昭8）
- 『戯曲平田篤胤三幕』本間鴻太郎（秋田県人雑誌10—9 秋田県人雑誌社 昭12）
- 『秋田に於ける二大偉人』北沢公平（総合教土研究 秋田県師範学校秋田県女子師範学校共編 秋田・秋田県 昭14）
- 『平田篤胤大人と観音像』川村五峯（秋田8—2 秋田社 昭15）
- 『明治戊辰の役に於ける我が秋田の勤王（1）（2）』東山太三郎（秋田図書館報32、33 秋田・秋田県立秋田図書館 昭15）
- 『篤胤先生の碑石は抱還り産か？』鏗銭生（瑞木1 秋田県角館町・瑞木の会 昭15）
- 『平田精神の昂揚』古利貞三（秋田県人雑誌14—2 秋田県人雑誌社 昭16）
- 『伊吹於呂志』（秋田文化風土記4）解説 伊藤永之介（秋田10—8 秋田社 昭17）
- 『平田篤胤と勤皇秋田』秋田市役所編 秋田・編所 昭

18 9頁 B 6

「今ぞこの人を想う平田篤胤の尊皇」藤田徳太郎（秋田県人雑誌15—3 秋田県人雑誌社 昭17）

「平田篤胤—其史跡—学の精神と塾教育」小島好治 秋田・三光堂書店 昭17 162頁 B 6

「平田篤胤大人の百年の御祭に」村田光烈（秋田・秋田社 昭18）

「平田篤胤百年祭記念展覧会陳列目録」県社彌高神社奉賛会編 秋田・編所 昭18

「平田篤胤と秋田」矢吹重政 秋田・三光堂書店 昭18 116頁 B 6

「平田大人記念」秋田県人雑誌16—11 秋田県人雑誌社 昭18 35頁

平田篤胤大人特輯（草園23 秋田・草園社 昭18 38頁）

「独立独行の平田篤胤」秋田翼賛叢書7）大政翼賛会秋田県支部編・秋田 編所 昭18 28頁 B 6

戦後 「伊吹舎門人姓名録抄」秋田県関係ノ分」川越重昌編 昭29

「平田篤胤の生活と学問」穴

沢辰雄（『ふるさと』のひと）秋田県警察本部教養課編 秋田・編所 昭34）

「平田篤胤大人と信淵先生—平田大人の墓前に詣でて—」櫻尾元（信淵研究7 秋田・秋田経済大学佐藤信淵研究会 昭41）

「平田篤胤の『赤夷伝略』」伊藤裕（叢園68 叢園社 昭41）

「篤胤の碑」瓜中方二（叢園71 叢園社 昭42）

「和歌に見る国学者平田篤胤—付、平田篤胤大人贈位運動の提唱—贈従三位平田篤胤大人命」小島好治（信淵研究14 秋田 秋田経済大学佐藤信淵研究会 昭47）

「郷土の大先覚者平田篤胤」小島好治（信淵研究15 秋田・秋田経済大学佐藤信淵研究会 昭18）

「織瀬夫人伝—日本婦道の亀鑑」伊藤裕 秋田・彌高神社 昭51 51頁 B 6

「久保田藩の和学と平田古道学」新野直吉（秋大史学23 秋田・秋田大学史学会 昭

51）

「平田篤胤と秋田乃門人」桐原善雄編 秋田・編者刊 昭51 56頁 B 5

「篤胤の思考方法」高木洪爾（秋田風土文学2 秋田風土文学会 昭51）

「平田学の構図」高木洪爾（秋田風土文学3 秋田風土文学会 昭53）

「平田篤胤と崎人十篇（1）」坂本春吉（出羽路68／69 秋田県文化財保護協会 昭55）

3. 発行所関係

明治 「平田篤胤翁伝」村井良八 秋田・秋田社活版所 明25 199頁

「平田大人の行実の大事」井上頼圀（秋田師範学校校友会誌 記念号）

昭和 「代表的日本学者としての平田篤胤大人」比佐祐次郎（秋田県人雑誌1—3 秋田県人雑誌社 昭3）

「平田大人の仏教排撃」比佐祐次郎（秋田県人雑誌1—3 秋田県人雑誌社 昭3）

「平田大人九十年祭記念号」秋田教育 秋田・秋田県教

育会 昭7 94頁

「平田篤胤先生と日本精神」（郷土の偉人と日本精神 平田篤胤1）及川健助 秋田・石川書店 昭9 106頁

「秋田の戊辰勤王と平田学」渡辺刀水（伊吹17 秋田・秋田県神職会 昭12）

「平田篤胤先生の勤皇精神を語る」奥田達雄 秋田・石川書店 昭16 86頁

「平田篤胤先生頌」土井晩翠（秋田11—5 秋田社 昭18）

「平田大人百年記念特輯」秋田11—9 秋田社 昭18）

戦後 「平田篤胤の事蹟」山田孝雄 秋田・秋田経済大学佐藤信淵研究会 昭48）

「平田篤胤、佐藤信淵大人贈位追陞請願書」山田孝雄（信淵研究15 秋田・秋田経済大学佐藤信淵研究会 昭48）

4. 秋田県関係新聞

明治 「狂歌師貞顔と平田翁」上・下）小泉古処軒（秋田魁新報 秋田・秋田新報社 明36）

- 「平田翁の奥墓」(上・下)(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 明37)
- 「平田大人行実の大要」(上・下) 井上頼圀(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 明42)
- 「国学者の哲学」平田篤胤研究緒論(1) (2) (4) (5) 成田重郎(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 昭3)
- 「平田大人九十年祭に当りて」(上・中・下) 佐賀藤松(秋田魁新報 秋田 秋田魁新報社 昭7)
- 「郷土が生める偉人」平田大人九十年祭に際して(秋田魁新報 秋田 秋田魁新報社 昭7)
- 「平田篤胤先生と日本精神につき(1) (3)」坂本春吉(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 昭11)
- 「篤胤大人に就いて」小島好治(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 昭12)
- 「平田精神と短歌」由利貞三(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 昭15)
- 「平田篤胤大人贈位追陞問題」小島好治(秋田魁新報 秋田 秋田魁新報社 昭15)
- 田 秋田魁新報社 昭15)
- 「篤胤と紋章(1) (5)」宗形太山(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 昭15)
- 「篤胤と紋章」を駁す」三田田米治(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 昭15)
- 「嬰兒は育(一)「篤胤と紋章を駁す」に就いて」宗形太山(秋田魁新報 秋田 秋田魁新報社 昭15)
- 「再び「篤胤と紋章」を駁す」(上・下) 三田田米治(秋田魁新報 秋田 秋田魁新報社 昭15)
- 「神道維新と平田篤胤」小島好治(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 昭16)
- 「平田篤胤大人」彌高会員が語る郷土の偉人伝(1) (6)」小野襄 東山太郎ほか(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 昭17)
- 「平田先生の事ども」(上・中・下) 北島一(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 昭17)
- 「国学四大人の贈位」平田篤胤大人御贈位に際し」三田田米治(秋田魁新報 秋田・秋田魁新報社 昭18)

5. その他

- 明治 「彌高神社献詠集」秋田県教育会編 明42
- 大正 「彌高拾遺」彌高神社編 大8
- 昭和 「平田篤胤」山田孝雄 支部省秋田県共同主催国民精神文化長期講習会刊 昭5頃106頁
- 「平田篤胤大人九十年祭について」村井良八(秋田放送局放送 昭7)
- 『平田篤胤翁百年祭記念論文集』秋田県社彌高神社奉讃会編 富山房 昭18 166頁 A5
- 「平田篤胤百年祭記念号」(弘道18 日本弘道学会
- 「平田篤胤の幽界観」阿部正路(新修平田篤胤全集第9巻付録 昭51)
- これらから見て昭和一五年から二〇年にかけて再びその思想、人物なりの関係著作物が多い。この時期は篤胤没後一〇〇年という年にもあたり、内外の政治事情を鑑みても憂国の総意にあたったことを知れば、国学的思想は国本の大

義にして、特に平田学の思想に意義づけられていたことが著作物からしても十分理解できる。ただこれらが秋田県のみに限ったことではなかったが、特に「郷土が生める偉人」秋田における「二大偉人」といわれる程、秋田にあって生きづいていたと考えられる。従って幕末から明治初年にかけてを没後の第一期の展開とするならば、昭和一五年から二〇年は第二期の国学的展開が秋田に生きづいて、それが帰結のところであったと思える。

明治以降、近世国学の衰退により柳田、折口民俗学がそれらにとって変わる新国学として位置づけられているようだが、近世国学の展開が近代になかったとはいえないであろう。第二次世界大戦の敗戦はこれらにあっても思想的国学は抹殺されてきた。二〇年代の著作物が少ないことがその証である。近年は再びこの地元でも再評価されてきていることは以上の資料から見ても分かるであろう。

一方明治以降の平田思想の展開にあつて、著作物にあつても彌高

神社の創立とその関わりを看過することはできない。従ってその略史を見ながら述べてみたい。

先ず、秋田に初めて平田篤胤を祀ったのが明治一四年で、没後にして三五年目である。勿論門人等の請願叶ったことであつた。その後平田敬仰の心が高まり、秋田県教育会が崇教母体となり、明治四二年佐藤信淵を相殿として祀り、場所も遷し彌高神社と敬称するに至つた。大正五年には再び遷座し、同八年に県社に列格されたのである。

前述の著作目録にしばしば見える秋田県教育会の功は彌高神社、即ち平田学思想の秋田県内普及に

一臂の力があつたといわざる得ない。秋田県教育会は平田篤胤が郷土の偉人としてばかりではなく学問神として高揚していったことは特筆させることにして、従って順じて進むならば平田思想の展開にあつてもっとも中心として帰結するところではなければならなかつたが、彌高文庫の平田篤胤関係著作物の保存、発行は昭和二〇年の同会の解消とともに失せてしまつた。

○

以上、概括的な報文に留まり、目新しいものもなかつたが、平田学の思想が一つには彌高神社という神格的高揚にあり、その展開の

平田大人与六郷熊谷家とのふれあい

熊谷 義一

秋田六郷町の熊野神社はその縁起によると、大同二年（八〇七）田村鷹創建とあるが、数度の火災のため古文書が現存せず不詳の点が多い。同神社の社家熊谷氏の系図も同様に判然としないが、菅江

真澄が文政十年（一八二七）九月頃から翌年七月頃まで六郷に滞在

し『月の出羽路』を書くのであるが、その大部分はこの熊谷家に宿泊したと言われ、その記事の中に熊谷氏家譜を調べ上げている。それによると。

○上祖熊谷宮三郎某也、宮三郎は累代の通称也。萬治三年（一六六〇）春の火災に類焼（ほろ

二期が見られることは、秋田での真の平田学への追求としてその徳を弘めんとしていることに特徴があつたといえよう。今後において詳略なる検討をすすめていきたい。

註一、『新修平田篤胤全集別巻』

昭56、名著出版、所版による。

気吹舎門人帳とも称す。

二、安政三年、惟神館武学講習所設立

三、文久三年、雷風義塾

四、慶応四年戊辰、明治元年

五、『平田篤胤と秋田乃門人』

桐原善雄著には言謂門人帳に漏れたる門人として、秋田人二名を加えているが、ここで

び）て。古記録、古器、神宝等も伝らず。かゝれば歴世に詳かならざる也。また古老の伝に、宮三郎は五代斗。続きたらむかといへり。累代さだかならざれば和泉守矩定を二代とさだめつべと、しかいへり。

とあつて、以下歴代社家組頭役を仰せつかった人々を記している。六代正司直堅の頃に真澄が滞留したと考えられる。その正司の弟に周蔵がいた。

は全集を定本とした。

六、吉川忠行は本居宣長門であるが、秋田藩校和学方に任せられていて、篤胤は秋田帰国後友人として偶していた。

七、主要先行書肆として近年一番よくまとまったものとしての『新修平田篤胤全集別巻』付録「平田篤胤研究文献目録」（飯澤文夫編）を基に、秋田県立秋田図書館所蔵本、本研究所有蔵文献等を書誌とした。本目録はできるかぎり直接原本にあたり確認したものである。

周蔵直房は周兵衛直雄とも称し、文化七年（一八一〇）生、明治二十一年（一八八八）死んでいる。この周蔵が平田大人の秋田在住時の生前の門人と知ってこれを研究したく、東京の川越重昌氏の教示を乞うた。以下の文の大部分は川越氏のご研究をそのまま伝えることとなる。

平田神道思想が既に全国津々浦々に広まったことを恐れた徳川幕府は遂に意を決して平田大人を江

戸から秋田へ追放した。天保十二年（一八四一）元日であった。大人は同十一日江戸を出発、途中下野仁良川にしばらく滞在、四月五日に同所出立、横手の弟手賀胤秀宅に同十六日着、秋田の久保田新町の甥大和田盛胤宅に長い旅の衣を脱いだのは同月二十二日であった。

平田先生秋田へ帰るの報は当時の秋田の心ある人々にどんなに大きな歓喜と希望を与えたかは今の私たちでも想像に余りある。雄勝に入ってから秋田までの旅の途中で入門を願い出、許可されたのは六郷の諏訪神社主斎藤喜代輔則吉（後則道と改名）ただ一人であるが、秋田には待ちくたびれた向学の志に燃える人々が次々に門をたたいたのである。地元秋田から四名がまず許された。

大人は天保十三年四月中亀の町に屋敷を拝領して五月十二日に引越しているが、その同二十日に入門を願い出たのが周蔵であった。門人帳には、熊野神社主正司二男と残されているが、これはこの時の先代つまり周蔵の父も兄と同じく正司と俗称を持っていた直熙のことである。彼はその時三十二

歳で国学に対する火のようなあてがれを抱いて雄物川を舟で秋田まで下っていった。

規則により差し出した入門願書の様式は。

誓詞

皇大御国乃上代乃道乎宇斯乃導伎傳賜布表己甚久願比斯怒夫爾依氏名簿乎進里氏其道爾趣伎教乎受賜波里侍比奴今與利後教賜波流如久重志美學比氏神乃御道爾習比公乃御掟爾違事無久又宇斯爾對比氏五年耶無久異伎心宇思波自都氏此宇氣比爾違波婆掛麻久毛畏伎天津神国津神知看志野米賜波年阿那可畏

何国何郡某藩町名村名

年 月 日

苗字 俗称年齢

姓名 花押

氣吹舎大人爾進留

大人の日記（夫人が書いたもの）の秋田在住時の分は天保十二年四月五日から十三年八月八日までが残っているが、その中で周蔵に関する箇所を抜き書きする。

入門した頃は日記そのものが二カ月近くも中断している。その年の末から彼の名が見えはじめる。十二月十一日 天気。一、御ち

ち様（大人）御出仕に付御城へ御出、賀藤才次殿同道、朝五ツ時の御出（な）り

一、御ひろう、梅津藤十郎様はつ書の間にて、御年より中御いつとう御あい被成候

一、小座敷御きやく 梅津藤十郎 賀藤才次様御ぜん御酒出ス

一、古川町おふみ様 たい次殿 龜 大山矢太郎殿 小たへ おふゆ 丹おみや しう蔵 手まはりばかり 手賀主水殿 御酒御せん出ス

とあり、はじめて周蔵の名が出るが、手まり（近親）の中に入れていることが注目される。

十五日 一、此方より江戸へ手紙出す 御ちち様御はん（御番）入に付 私ばかりしたため

古川町へしう蔵たのみもたせ遣ス

この頃の記事を見ると周蔵は当時内弟子として平田家家族と起居を共にしていたと思われる。

天保十三年一月十五日 天気 一、佐藤氏へ丸薬取に市を遣ス 一、渡部たい次殿 龜次つれ来

江戸へ遣ス 年礼状したためもらう

一、梅津御いんきよ様御入来

くわしばかり出ス 一、くま谷しう蔵来 十七日かつ初

一、守屋より黒こま ぜんまい 手紙添よこす 同人より夕方 神様へ上り候御餅一ツよこす

一、大山矢太郎殿年礼に來とあるからこの正月は六郷に帰っていたのではと想像する。元日配達に関係なく年賀状を書いた頃がなつかしい。

一月十七日 天気 夜に入り雨

一、安井森之進来

一、小野崎氏へ今日かうしやく

初の事しらせ遣ス

一、小笠原けんりう一寸来

一、くま谷周蔵来 御本少々

つす 又古川町へ御肴の事にて遣ス ふ（な）五枚松にも

たせ来 梅津様えの進物なり 一、旦那（大人のこゝろ）たい次

殿 駒之助殿 周蔵殿同道

梅津様へ御出 夜九ツ時御か

へり 雨ふる

二十一日 天気

一、川しり氏よりお守り札来
一、渡部たい次殿入来 御ぜん
出ス 色々咄し 夜に入かえ
る
一、周蔵殿来 とうゆ直したの
む

二十四日 天気 朝内少々あら
れふる

一、熊谷周蔵殿朝早く来 本の
事咄ス
一、守屋佐源二殿より てうち
んかへる そうめん二玉 手
紙添よこす

一、小野崎氏より内のむかひ来
御出なり(内湯の案内である)
一、梅津様へ御薬のそうだんに
御出(な)り 早く御かへり
一、庄次殿よこてよりかへる
ハツ時

一、大山早人殿来 風呂敷ぢさ
ん
一、すが原善兵衛 てうちんか
へす

二十五日
一、梅津様より御手紙来 返事
上る 本月のおちば 萬や
うべつき 四さつ御かへし申
候

一、小栗六左衛門入来 茶 く
わし出ス

一、勝蔵来 母のびやうきに付
一、守屋より手紙来 御留守ゆ
へ返事遣ハス

一、旦那 梅津様へ御出 小野
岡様へ御同道にて御出 夜九
ツ半時御かへり 白鳥みそ付
玉はる あつき御とりあつか
いなり

一、熊谷周蔵殿来 本うつし
旦那御かへり迄いる
一、太田喜右衛門殿 本うつし
に來 夕方かへる

二月一日 天気
一、安井森之進来
一、熊谷周蔵来 玉たすき渡
一、梅津様へ旦那御出 夕方か
へり

六日 大風 雪ふる
一、齊藤喜代助へ 目薬の書状
出ス

一、小笠原風龍より白酒よこす
一、同人 葉のそうだんに來

九日 天気
一、勝蔵御にもつ ひきやくし
らせに來

一、小野岡様へ旦那御出 古川
梅津様へ御立より ひろハツ
時御かへり 市供

一、あらまきより しゆけんい
ろいろうかかひに來 小野崎
要人殿さしづ

一、八重吉より ふな二枚よこ
す

一、熊谷周蔵殿 玉たすき ぢ
さん

一、小野岡様より 御薬みせ
御遣イ來

四月十日 天気 小ぬき氏より

しづ井庄二殿用代書ぢさん
一、熊谷周蔵殿一寸來 しづい
びよう人たのみ事 ことわる

一、仲庄八殿より 岩谷与五郎
殿昨日御出の礼に來

一、大山早人殿 小笠原氏 佐
藤氏 大山矢太郎殿同道に來

一、手賀氏お初どのしきよ 手
紙來

一、古川町たい次どの 亀次ど
の同道來

十八日 天気

一、今宮様より昨日の御礼とし
て たい一枚來

一、渡部たい次殿來

一、熊谷周蔵殿 政吉同道にて
家の事にて來

一、大山早人殿來

一、小笠原見龍殿來
一、梅津様御いんきよ御入來
出仕の事に付

一、淀川藤一郎殿來
一、熊谷周蔵殿來 政吉同道
家の事に付

一、夜に入淀川來 又大山氏來
願の事

一、小野岡市大夫様より御書來
たい二殿代書たのむ

一、小野岡様來勘兵衛殿遣イ
に來 御薬の事

この日には周蔵の同じ事を二度
書いているが、平田家には來客が
多く、夫人のてんてこ舞の様子が
偲ばれる。周蔵の家の事とは何で
あるかはわからない。

この夫人の日記を読んで行くと、
周蔵は入門最初は名も呼び捨ての
内弟子だが、それから次第に家族
同然に待遇され、やがて大人にと
って側近の高弟と成長して行く段
階がよくうかがわれる。

十三年四月二十日
天気

一、熊谷周蔵殿 政吉子供同道

来 御葉の事願ひ出る

印取に遣スカウリそば進物

一、熊谷周蔵殿来 夜ぶん留守
たのむ

七日 雨天

一、熊谷氏 夜に入かへり

二十五日 朝雨 九ツ時より雲

六月九日 天気

二十五日 雲り

八日 雨天

一、熊谷周蔵殿 玉だすき代ぢ

一、熊谷周蔵殿来

一、熊谷氏 淀川氏 小笠原氏

一、熊谷氏来

さん

十日

てつだい

四月晦日 雨天 大あれ

一、熊谷周蔵殿来

晦日 天気

周蔵に關係ある夫人の記録は以上であるが、この周蔵の紹介で熊谷家から政司直清が天保十四年八月朔日に入門を許されている。二十一歳の時である。周蔵の長兄正司の孫に当る。尚周蔵の姉お由子（幾とも称す）は刈和野の根本九郎右衛門通久に嫁したがその長男が通明で、好学の母の指導で六歳から飯村塾に学び、学識広く、明治十九年には周易について明治天皇に進講の榮に浴した。三十二年県人初の文学博士となった。

一、もて木巳之助殿より 熊谷氏へ書状来

十三日 雲り

一、熊谷周蔵殿来 駒之助来

熊谷家のいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷周蔵殿来

一、熊谷氏来

八月朔日 天気

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

五月朔日 大あられ

十五日 天気

一、熊谷氏 駒之助殿来

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷氏 亀之町へよい遣ス

丹氏淀川氏へたのみに行

三日 天気

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、もて木様返事 熊谷氏にいたさせる

十七日 朝雨 九ツ時天気

一、熊谷周蔵殿 日々（次脱字か）たのむ（みの誤りか）来

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

天神様の事

一、御かうしゃくしまひ 賀藤氏へ御出 夜九ツ時に御かへり 熊谷氏留守にいてくれ候

四日 天気

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

二日 天気

一、熊谷氏留守来

一、熊谷氏朝より来 大和田庄次殿善兵衛へ行 品々本ぢさん

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷政吉 市太 亀之町宿

十八日 天気

五日 天気

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

り

一、熊谷氏留守来

一、熊谷氏来 や（かの誤りか）なつち こがたな 品々かひ物たのむ

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

この頃よく出てくる熊谷政吉という人物が誰なのか、更に周蔵とは別のように熊谷氏と書かれる人物もよくわからない。後述の熊谷家の政治直清との関係も明らかにしたいと思う。

七月十日 天気

一、熊谷氏来 古川町へたのむ

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷周蔵殿 玉だすき代ぢ

一、熊谷周蔵殿来

一、熊谷氏来 夜に入雨

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷周蔵殿 玉だすき代ぢ

一、熊谷周蔵殿来

一、熊谷氏来 夜に入雨

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷周蔵殿 玉だすき代ぢ

一、熊谷周蔵殿来

一、熊谷氏来 夜に入雨

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷周蔵殿 玉だすき代ぢ

一、熊谷周蔵殿来

一、熊谷氏来 夜に入雨

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷周蔵殿 玉だすき代ぢ

一、熊谷周蔵殿来

一、熊谷氏来 夜に入雨

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷周蔵殿 玉だすき代ぢ

一、熊谷周蔵殿来

一、熊谷氏来 夜に入雨

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷周蔵殿 玉だすき代ぢ

一、熊谷周蔵殿来

一、熊谷氏来 夜に入雨

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷周蔵殿 玉だすき代ぢ

一、熊谷周蔵殿来

一、熊谷氏来 夜に入雨

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

一、熊谷周蔵殿 玉だすき代ぢ

一、熊谷周蔵殿来

一、熊谷氏来 夜に入雨

熊谷政司はいみなは直清（社家をうける）松陰と号した。文政六年（一八二三）十月一日生、明治三十八年（一九〇五）五月十七日死去。

平田大人の思想が六郷で花を開いたのは直清の時、大人の歿後は鈴木重胤との親交が特に深く、六郷の御役屋に出仕し、夜は自宅で子弟を集めて平田神道をはじめ広く漢学漢詩和歌を教えた。六郷

太桂寺の梵鐘銘を研究模写のため眼を使い過ぎ、三十七歳頃より眼病となり、元治元年（一八六四）

四十二歳で失明したがその後も學問への熱情は益々加わり、平田神道の伝授を以てこの地を中心に勤王思想をめざめさせた。失明後入門者が後を絶たず「北羽の塙保己一」と仰がれた。

明治五年（一八七二）学制頒布後は県の私塾廃止令によって私塾は閉鎖したがその後も入門を乞う者がおびただしく、明治十六年に県の特別の許可があり、私塾「交文舎」を再開している。交文舎は松陰の歿するまで、常に寄宿して教えを受ける者数十人という幾多の勤皇の志を抱く英才を教育した。明治二十五年（一八九二）八月一日、松陰の古稀を祝して六郷の同家で賀宴があったがその記念誌として東京で出版された「千代の松風」に収録された全国からの祝いの文々は正に驚く程の豪華さで、和歌六〇四人、俳句二〇八人、漢詩文一五四人、計九六六人という当時の全国的文化人がその名を連ねていて、松陰の名声の高さ、その知己、友人、門人の広さは驚嘆に価する。

この直清松陰の弟に直光武五郎がいる。武五郎は天保十三年（一八四二）二月生れ、明治三十五年（一九〇二）七月死去。幼い時に父母を失い、長兄松陰の薫陶を受けた。生れつき非常に勝気で、従兄の根本通明は二十歳の年長で當時既に秋田藩明徳館の教師であったが、兩人は學問上の議論で常に互いに相ゆずらないので、松陰も遂に意を決して武五郎を江戸に出立させることになる。十八歳の時である。後日武五郎は「われ天下に頭を下ぐるもの二つ。一は上皇室、一は家兄である」と言っている。武五郎は江戸で広く天下の志士と交わり、世界の大勢に通じた事が彼の歴史に大いに幸いしたと思われる。当時秋田藩論は佐幕に傾いているとの情報を得た彼は早駕籠を飛ばして三日半で秋田へ入り、当時佐竹藩国家老浜江内膳の四天王の一と言われた次兄熊谷清右衛門のついで内膳に国内の形勢をうったえ勤王説を説得するのである。これに動かされた内膳の力も加わり、久保田城下には勤王（革新）的思想が広まって来るのである。

戊辰戦争史上に残る茶町幸野屋

の仙台藩使者十一名が砲術所有志らによって襲撃された事件は衆知の事であるが、その中の富岡寅之助という人物は武五郎であるという説は根強く考えられる。とにかくこの戦争で武五郎は官軍参謀大山格之助からその才器を見込まれて参謀付書記となった。

この戦後の勤王藩に対する恩賞は薩州長州が十万石で格別多く、秋田藩は二万石であった。又秋田藩士で軍役に服し軍功をたてた者は出兵人員総計八、六九八人中恩賞を受けた者は僅かに三名で、熊谷武五郎、添田清左衛門、中安泰治で、各金二百両宛下賜されている（『秋田県政史』による。彼二十八歳の時）。

その後武五郎は、沢副総督に従って上京し、直に太政官に出仕、岩倉公の知遇を得た。明治二年、駅通司判事、本保県知事、権大内

平田篤胤と四方山譚

——彌高神社の草創は平田神社——

はじめに

秋田の生んだ先覚者は多く、そ

吏、財務課長を歴任。明治七年、波沢栄一の後を継いで大蔵大臣に昇任した。十年華族銀行支配人、四十四銀行頭取、通信管理局長、一等郵便局長等の要職についている。

武五郎は正に明治維新の風雲児だったが、同郷の勤王の志士平田大人の門人の辻辰之助とも常に同志として連絡を取りながら互いに活躍していた。

平田大人の教えがこの動乱の時期に一つの「えにし」によってこの県南の地域に大きく人脈を作っていた事を今またしみじみと思うのである

この小文は前述のとおり、川越重昌氏、それに伊藤裕氏、桐原善雄氏、故北嶋一氏より色々お教え頂いたものであり、ご無礼ながら改めて奉謝申しあげる。

（本所研究調査員）

桐原 善雄

の中で平田篤胤、佐藤信淵両大人は秋田市千秋公園に鎮る彌高神社の御祭神として祀られていること

は世に広く知られているところである。

彌高神社は八橋日吉神社境内地に、明治の初年平田篤胤の門人等に依って創建された小祀を明治の末頃秋田県教育会に依って秋田市東根小屋の旧八幡神社境内地に遷座、佐藤信淵大人の霊を合祀し、彌高神社と社名を変え現在に至っている。或る学者は彌高神社は手形山神社創建に始まるとしている。何によって記したのか分らないが「平田篤胤の墓は今の手形山にあり、その後有志によってその霊を手形山神社に祀っていたが、明治の末佐藤信淵と共に彌高神社に祭られるようになった云々」との誤りの記事を読んだ。筆者は十二、三年前から秋田における平田篤胤の門人と地域文化の関わりと平田篤胤に關した古文書に關心を持ち調査してきた。その結果、平田篤胤についての片鱗を知ることが出来た。

先に述べた手形山神社のことも、実は秋田県教育会の有志によって創建の計画が進められ、今一步と謂うところで取り止めることになったものであり、その誤りを訂正するとともに草創期の事や創建者等

の真心を永々伝えるため紹介したい。

時恰も彌高神社に設けられた、平田、佐藤両大人研究所発足二周年を迎えるに当り、平田篤胤の人物像を織り交ぜながら、彌高神社の産みの親に等しい平田神社の創建に焦点を当て、若干述べさせていたきたい。

篤胤と国学者

平田篤胤は江戸の末期安永五年八月二十四日、久保田の城下(秋田市)佐竹藩士、大和田祚胤の四男として生れ、二十歳の時江戸に出て、国学を研究し、貧乏と非運にも負けないで平田神道を大成、国学の四大人と仰がれるに至った。生前の門人五五三人、神、玄、儒、仏、医、兵、易、暦と夜を日につぎ著述に著述、口述と著述の数、百余部三千巻に及ぶとも称された。平田篤胤の功を高く評価され昭和十八年従三位を贈られたことは世の知るところである。

今迄に平田篤胤に関する本が数多く出版され、全集等は三度発刊する程、調査と研究が進められている。見方に依っては全部調べ盡されたようにも見られるが、角度

を変えて一步掘り下げると分らないことが相当ある。例えば幼年期、少年期、門人等も分らないことが多い。多くの研究家は口を揃えて、少年時代の平田篤胤を愚鈍なりとしている。或る者は幼名は正吉であったから「馬鹿正吉」とののしられ、親も手を焼く程物覚えの悪い子供であったと述べている。又幼時、少年時代の鈍重と魯愚は大器晩成型、そこに活躍すべき活力が秘められ、不撓不屈と堅忍不拔の精神が鈍重の中に蓄えられていたと述べている。

平田篤胤を愚鈍であるとの始まりは、明治天皇御巡幸に際し、性行調査書作成に際し、親類者は平田篤胤の幼年期、少年期について聞いたことを県で書き出させた。

これが世に謂う聞受書である。親類の者は、甥の徳胤と、泉なる者のようであるが、富山市に在住の大和田盛胤氏に尋ねたところ「親類に泉なる者はいないと思う、聞いたこともない」と洩らした。こうした出发点からおかしいし、常に謙遜して話をしたのを鵜呑みにしたのが聞受覚書になったとも思える。辞世の歌には「おもふこと一つも神につとめをへす、けふやまかる

かあたられの世を」と詠んでいるから、この一首によっても謙遜したところがうかがわれる。問題の聞受覚書は秋田市在住の某氏蔵しているらしく、且て一度訪ねたが病氣との理由で拝見出来ないまま今日に至っている。

国学の四大人は荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤大人を呼んでいるが、国学の鼻祖については、本居の師は僧の契沖であるのに対し、平田篤胤は荷田春満であるという異なった考えに立つ事があり、師の後継者と自認している場合によつては相反する時もある。幽冥観は特に異なっている。後学山田孝雄博士は、優れている点として紹介したのは「すべて師の須佐之男之命、禍津日の神の事を言われし説どもには甚く違ふ事多かれ」と、ここが異っている。師の本居宣長は、夜見の国で受けられた穢が神になったのだから世の中に禍をなすところの神様だという。これに対し、穢れが神様になったに違いないが、世の中に禍いをする神様でない。禍を憎む神様だといっている。乃ち本居宣長は二元論で平田篤胤は一元論に立脚している。この考えが平田神道

と発展することになる訳で、大人は神の存在、幽冥界の存在を信じて、靈魂の存在、神の存在を確認しなくては敬神思想は起こらないのであり、口ばかり神様のことを喋って居っては神を敬っているとはいえないとして、敬神思想の根底は神様の存在を口でばかり説いても心の伴わないのは一番人を害することになる。心靈、靈魂を確認して、そうして幽界に関する思想が深くなっていると考えていたのである。

平田神道の特徴

平田神道の業績、特質点等は少なくないが大きく分けると、国学を宗教迄発展させた点と、国学は難しく学者の学問であるという認識を一般の人々にも、乃ち通俗化したことであろう。従って門人も多いのである。当時の神道界は白川、吉田両家によって支配されていて、平田篤胤の三十三歳の時（文化五年）神祇伯白川家より白川家の神職に古学の教授方の依頼を受け、又四十三歳の時（文政六年）神祇長上と自称していた吉田家からも同家附属の神職に古学を教えて呉れとの依頼を受けた。更に六十五

歳の時（天保十一年）前に述べた白川家より学頭として迎えらるるに至った。神道界を支配していた白川、吉田両家の神道を統一し、平田神道として（復古神道）後日王政復古の原動力迄発展したことは世人の認むるところであろう。

白川家で古道を教えていた頃、「鈴振神主、拝み屋」等と吉田家を俗神道と攻撃した。その甲斐あってか、吉田家から白川家同様、附属の神職に古道の教授方の依頼があった。さすがの平田篤胤も攻撃の矛をおさめた。かつて本居宣長の高弟服部中庸は大人を賛し「大道の議論に及べば、弁舌瀧の流るるが如く、博覧広才萬人に勝れ実に故大人の後如此人物未及見聞」と称し、この一言こそ学統継承問題も、これで折紙をつけられたといえよう。それが学風を慕って入門する者は年と共に多くなった。このことは、白川、吉田両家に於いて古道を教授したことも加わったようである。北は松前、南は薩摩に至る迄全国一円に門人の拡がりをみるに至った。

秋田の門人

伊吹舍門人帳も数種あるが、正

確視されているのは平田家の門人姓名録を養子の鉄胤と門人の井上頼圀に依って校されたいわゆる世にいう神習文庫の伊吹舍門人帳である。伊吹舍門人帳に依れば生前の門人五三三人、没後の門人は慶応三年迄一三三〇人。秋田県関係は生前は五十二人。明治五年迄二六三人。洩れたる門人二人を入れて二六五人であり、これは実数に近いものと思う。こうした門人帳のうち秋田県における明治九年迄の門人帳が作成されていたという篤胤研究家で高名な伊藤裕氏の助言のもとにその所在を旧家、門人の後裔などを尋ね歩いたが徒労に終わっている。

伊吹舍門人帳に記入されていないが、確かに門人であると思われるのが散見される。その二・三について述べると、当時肝煎役でもあり、南秋田郡田浦大町村、百二十余戸を神徒に改宗させたという、地元では平田先生の御弟子であつたと伝えている者がそれである。過ぎし日に伊藤裕氏、故人となつたが元高校長加藤裕と同道し、その肝煎役を務めた北島一光宅の古文書を一日がかりで整理と調査した事がある。又仙北郡六郷町の辻

辰之助を、伊藤裕氏は直門であると述べている。又久保田藩の惟神館教授吉川忠行、忠安親子、由利郡下蔵堅寺に建立している歌碑に平田篤胤の門人佐々木胤英、没後の門人桜田誠一郎妻コトの夫の履歴書として県立図書館蔵に依れば、平田の門人に記入せしめたる者六十余名に及びたり、と記している。その外処々に門人であったとする者も居るので実数は分らない。山田孝雄博士は門人について、藩主、大名等は門人帳に記されていないと述べている処より門人の正確な数は分らない。いづれ諸状況よりして、秋田において明治九年迄の門人帳が作成されたと見る可きで、この存在をいずれ日の目を当てたものである。

神社創祀とその人々

全国的にみて門人の多い処は信州、美濃、武蔵、秋田、薩摩の順となつている。門人の多い所は学風を慕う者も多い。平田篤胤の帰幽十九年目に早くも門人の手によつて、埼玉県入間郡松井村の桜木神社境内に小祀を建立、秀枝（ほつゑ）神社と称し、相殿に本居の高弟、服部中庸を祀った。これが最

初の神社で次に慶応二年三月二十四日、長野県下伊那郡山吹村に、片桐春一の発起により本学神社を創建。御祭神は国学四大人。この伊那には門人が多く、その数六二七人の隣りの美濃では三五七人。武蔵の一六八人。薩摩の六四人と伊藤裕氏は数えている。くだって明治九年に神職の手に依って静岡県賤機山の浅間神社の末社に前記の四大人を祀る。平田家でも平田神社を建てこれを祀る。現在東京都渋谷区の前平田邸に法人格を有する平田神社が鎮座しており、筆者は平田益刀自在世中に四回程訪ねたことがある。愛用の机と門人帳について訪ねるためであった。

秋田県において篤胤を初めて祀ったのは、明治十四年八月、南秋田郡八橋村（現在の秋田市八橋）県社日吉神社境内地に平田神社を建てたいとして知事に願い出たところ、同月二十六日許可を得て創建。この平田神社は後に社名を変え彌高神社となり今日に至って居る。この事について資料等によって、従来の記事より少し掘り下げて述べてみたい。

平田神社建築祭祀願

当地出生、故平田篤胤翁在世

中、大道衰廃を歎き、其の師本居翁の遺志を継ぎ、盛に敬神尊王の大義を唱へ、千思萬考、碎身粉骨、一千余巻の書籍を著述、衆諸を教導し、復古の基を開き、偏く天下の人民をして大義名分を相弁せしむ、其の功績の大なる世人の知る所なり、且明治戊辰の役、旧藩勤王の列に加はし候は、畢竟その余蔭の然らしむる所に候。依之本居翁の神霊と共に南秋田郡八橋村県社、日吉神社に於いて、春秋祭祀の際敬慎信仰致来り候、然る所御一新以来有功の神霊夫々御追祭被為在候折柄故、同志協議の末、八橋村県社、日吉神社境内に一小祀を建築致し、平田神社と称し、永世祭祀仕度、別絵図面並に小祀雛形、永続方法書相添へ此段奉願上候也。

明治十四年八月

南秋田郡船大工町

有志総代人 針生 源太郎

同大町三丁目

同 山中 新十郎

同 同茶町扇ノ丁

同 桜田 誠一郎

同手形谷地町下丁

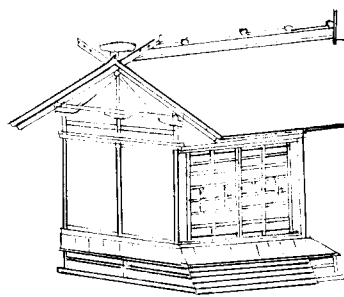
同 羽生 氏 熟

同上肴町

日吉神社祀官権中講義

小谷部甚左衛門

秋田県令 石田英吉殿



提出図面

との如き「願出書」が、南秋田郡八橋村、戸長平野東蔵を経由して提出された結果

書面願之趣聞届候事

明治十四年八月二十六日

に許可となった。雛形の小祀は九尺四方で、総予算は三百九十七円五十銭であった。明治十四年の物価の一例として、玄米三斗入一俵一円七十銭前後でこれに比して、予算書を見る限り相当の良材を使用したとみられる。創建に至った経緯について定かではないが、明治天皇御巡幸に相当深い関わりが

あるものと思料する。それは御巡幸を仰ぎたいとする県当局の相当前から政府高官に働きかけていたと思われる文書が残されていることから察せられる。

創建についての中心人物を知る由もないが、資金は永続方法に署名している中で山中新十郎が見えるから、当時彼は豪商の二代目であると共に銀行の重役に就任している点等より推定出来る。従って代表の経歴、年令等を分析検討することにより、当らずとも遠からずとなる。

そこで一応願出人の順を追って検討してみると、

(一) 小谷部甚左衛門は生前の門人。当時五十七歳。明治二十一年没。県社日吉神社祀官として明治十年より奉務。

後裔は秋田市内に在住して

いる。

(二) 羽生氏熟



嘉永二年二月十一日生。当

時三十二歳の働き盛りで秋田藩の祐筆。明治五年秋田県吏、その後秋田一大区長。県書記官、千葉県書記官、埼玉県参事官、秋田県参事官、県会議員三期、秋田市長等の経歴の持主。神社創建当時は河辺郡大張野を開拓せんとする目的で秋成社を興し、帰農の藩士一三一人を従事せしめ開拓に当る。士商法に終り、明治十四年九月の御巡幸の際大張野の現地に御臨幸を仰いでいる。羽生家には上書、建白書綴が蔵し、前記の創建についての控も蔵されていたところより、中心人物に近いではないかと思われる。羽生家に平田篤胤の孫、平田集枝が養子に来てゐることは奇と言えずに何んと申すべきか。

(三) 桜田誠一郎は没後の門人で天保元年八月二十五日生。当時五十一歳秋田藩士、明治三十九年大社教より小教正に補されている。妻コト作成の履歴書に依れば平田門人帳に記名せしめたる者六十余人に及べりとみえる。又『白川家の

門人帳』近藤喜博博士編によれば寛政十年（慶応四年に至る間に、扇屋正七外十二名を白川の門人として紹介している。桜田自身も入門している。十二人中、平田篤胤の没後門人には三人を紹介している処等よりして、平田篤胤と白川家との関係の深いことや、桜田誠一郎の行動力の深さがうかがわれる。後裔は秋田市に在住。

(四) 山中新十郎は勤王の豪商としてその名も知られた一代目新十郎の長子、二代目新十郎であつて、幼名は信一、後年新十郎と襲名。当時四十六歳位で働き盛り。銀行の取締役もしていた様で、永続方法に一金百円を資金とする旨の書類等より、建築資金は山中新十郎によつたものと推定する。

(五) 針生源太郎については皆目不明。明治十四年の頃は船大工町に住していたといひ、当時の戸数は十一戸。材木問屋の町であつたが、明治十九年の俵屋の大火災により全焼した。全焼後転居したのか分らない。古老を訪ねたるも、針

生なる者の記憶はないと申し、居るのが県内に後裔者は居住してない事が分つた。現在追跡調査中である。

以上の有志によつて小祀を創建、その後神社の永続基礎が固まり、明治三十五年九月、平田神社保存会の結成をみるに至つた。時の知事下岡忠治も神社保存会に援助している明治四十年二月二十日には秋田県教育会の常任委員会でも手形山なる平田大人の墓地修理工事を世に訴えんとして発議したことが、諸都合により手形山神社創建をとりやめ、平田神社を秋田市東根小屋の八幡神社跡地に遷座、佐藤信淵の神霊を合祀し社名をば彌高神社に変えたのである。その後秋田市千秋公園に遷座、現在に至る。

明治四十一年一月四日秋田県教育会常任委員会に於いて、社殿建築費の協賛方を都市長会に働きかけ承諾をとりつけるに至る。明治四十二年十月十六日県議会議事堂に於いて教育会総会を開き、手形山神社創建は資金の面等より中止し、かわりに旧八幡神社跡地を買い求め平田神社を遷座、佐藤信淵大人を合祀することになったと経緯を報告。依つて境内地の買入金、

その他の資金の不足については、資金募集を知事が先頭になつてこれに当るとする件は万場一致で可決となつたのである。

八橋の日吉神社境内地より十月十六日午後〇時三十分御羽車御発となり、同日午後一時三十分旧八幡神社跡地に御到着、遷座祭を執行。同十月十七日には合祀祭。午前九時公会堂に於いて遷座祭を祝い、大講演会を開く。講師には法学博士水野練太郎（神社局長の要職）、文学博士井上頼圀、農学博士沢木真吾であつた。遷座に伴い社殿の修理費、土地の買入金等、一七、〇二四円。祭典費七〇〇円を予算化していた。社殿の竣工は八月十七日に終つて居る。彌高神社となる社名の変更は十月十二日許可となる。

大正五年四月二十日現在地に彌高神社を遷座し、大祭を執行した。当時の社格は無格社で社掌は大山重華（古四王神社宮司）であつたが、後に水野練太郎が神社局長であつたこと等より県社への昇格に関りがあつたと思われ、大正八年二月八日県社に昇格となつた。

彌高神社発足時の社掌（現在は宮司）大山重華で、亀井寛造より

北嶋一となり、現宮司は四代目に
 当り、元県神社庁長の要職にあっ
 たその北嶋一の長男北嶋昭氏が就
 任したのである。

まとめにかえて

最後に平田篤胤の生家に当る大
 和田家、平田家との秋田での関り
 を述べてまとめたい。

篤胤は平田家の養子となり、養
 子鉄胤の息子延胤の娘に盛胤を迎
 え三代目に当る盛胤の長女を妻に
 迎えたのは、鹿角市(旧十和田)の
 帝大出身の学者であり政治家でも
 あった諏訪富多である。長男の善
 綱氏はホテルを経営し十和田に在
 住。善綱氏の姉の息子、つまり甥
 に当る米田勝安氏は、平田家邸内
 建立されている、宗教法人平田神
 社の責任役員の要職にある(東京
 在住)。

いま一軒は秋田市追分(旧秋田
 市手形)の羽生家で、平田神社創
 建発起人代表の一人である羽生氏
 熟の姉(孝)の娘に、平田篤胤の
 孫に当る胤好の長男平田集枝(つ
 どゑ)を養子に迎えている。集枝
 は当時視学官とのこと(氏熟の孫
 現当主氏貞氏が語る)。羽生集枝の
 孫封郎は千葉大学の教授として活

躍している。氏熟の孫は元官吏勲
 五等羽生氏貞氏(秋田に在住)であ
 る。

御生家の大和田家との関りのあ
 る家は川井家と川尻家であって、
 現秋田市に住し秋田市役所職員川
 井義男氏の祖父の義壮として、大和
 田家の当主である盛胤氏の叔母を
 迎えている。又義壮の妻の姉を迎

□随想□□□□

信淵大人と老人問題

大人が「老」又は「愚老」と自
 らを言うようになったのは、還暦
 六十歳の時であるが、それ以前は
 「予」が何々と言っていた。この
 頃は江戸追放中で、大方は千葉県
 の東金市内の大豆谷に居ったよう
 だが、江戸住いの平田大人の家に
 はしばしば出入りしていた。

翌春、江戸に住っていた長男の
 家が大火で類焼、江戸へ置いた著
 書や研究資料は殆ど失ってしまった。
 六十四歳になって深川永代寺
 境内に住まっていたが、ここは永
 代橋の向う側なので江戸の内では

えたのは現秋田市住で教員川尻田
 出夫氏の祖父である。日出夫氏の
 兄は元労働省の高官であった忠氏
 (東京在住)とは遠縁ではあるが
 関りをもっている。

平田家の直系は五代にして、子
 供のないところより消えたとはい
 え、平田篤胤の偉業は今に残ると
 ころである。(本所研究調査員)

川越 重昌

なく、又この頃長男信昭は病気が
 ちであり、日本橋の長男宅を見舞
 ったのがバレて、江戸十里四方追
 放となり、こんどは浦和市郊外鹿
 手袋へ移った。

大人は六十になって「老」がと
 書いてはいるが、著書を調べてみ
 ると、その後又「予」がと書いて
 いて、たまに「老」が出る。翌年
 になると全く「老」が消えて元の
 「予」で直されてしまう。

「俺はまだ老じゃない」と感じ
 たのか、火事で資料を失ったので
 「これじゃ老いてはいけない」

と思い直したのかはわからない。
 そして全く「予」が消えて「愚
 老」となるのが、十里四方追放後
 である。そしてその後こそが大人
 の学問の中で、最も重要なポイン
 トをぬき出して強烈に主張し出し
 ている。

大体大人の生涯というのは波乱
 に満ちており、十六歳にして旅中
 に父と死別し単独江戸へ移った。
 時は天明の大飢饉のさ中で、それ
 から四十歳迄の暮らしは、ポツポ
 ツと消息が見える位であるが、よ
 く全国を歩き廻って見聞を広めて
 いるように見られる。四十八歳大
 人は七ツ年下の平田大人の門に入
 る。ここで学んだものが「古事記」
 で、この開眼によって五十歳代、
 大人の代表的著作が次々と現れ、
 六十を越えたのである。

農学も経済学も武学も産業技術
 学も、大人の学習範囲は広大なも
 のになっていたのであるが、それ
 を何の為に用いるかに至っては両
 刃の剣で、賢い悪魔ともなる。
 ここでどっしりとその目的観を
 附与して下さったのが、平田大人
 であったのである。大人が既に持
 っていた科学的(当時としての)
 膨大な知識は、師である平田大人

のかなうものではなく、互いに学び合う形となっていく。平田大人は古道の中に日本民族のすばらしさを説き、民族の自尊心を啓蒙し、信淵大人は、そのための実践具体策をプログラムする形になっていた。

そのプログラムは当時の世界情勢との中で試案されるが、御存知のように欧米先進国は、アジアを初め現在の開発途上国の植民地化に専心相競っていた。信淵大人亦その競争に負けるような男ではなかった。現在の日本人は、信淵大人を目して侵略の親玉のように評するが、欧米の他国侵略は「進入」と称して、自国のみを悪の権化のように主張している。当時領国下にあつて、余程強力に主張しなかったらその針少程も可能ではなかったはずである。

平田大人も信淵大人も、要する処は「皇国護持」の主張であつた。それは植民地化していくアジア、アフリカの中で、やっとそれを防げた源動力となつたではないか。彼の阿片戦争は、天保十年の出来事だつた。信淵大人は時に七十一歳の年だ。この時の驚きを「天地開闢以来未曾有の珍事なり、予

甚だ此を驚異せり」と述べている。こんな時にはもう愚老なんて年老いて等居られなかつたことだらう。七十を越えた大人は次々と阿片戦争資料を集め出す。そして西欧・米国の侵略戦争への具体的対応戦法の研究を始めるのである。そして先ずは阿片戦争の戦法をつぶさに調べあげ、「水陸戦法録」及び「東西火攻辯」の名著を書くのが既に七十九歳の年である。大人は単に戦法を以て、具体的に皇国を護持しようとはしていない。それよりも第一に為さねばならぬのは、中国との提携策であつた。「存華挫狄論」という著書は読んで字の如く、中華と手を結んで狄（この場合は英国のこと）を挫くという論で、大人は決して若い頃の空想的世思統一論ではなく、「愚老は満清の君臣をして……復讐の義兵を起こし、英夷を征伐して大に此を打ち破り、悉く侵地を恢復し、厳く此を逐ひ攘て、東洋に遺類ながらしめ、永く本邦の西屏たらしめむことを欲す。」と結んでいる。これが大人の最も具体的事実に対する主張であつた。それが再び言うが七十九歳と八十歳の時であつた。年代は既に嘉永元年

となつていた。

大人はこの後二年目の嘉永三年正月六日八十二歳で歿したが、それから三年目の嘉永六年六月、日本の隅々に迄驚きを巻き起こしたペリーの初来航となつたのである。東京裁判で、誰だつたか、ズバリ言いぬけた被告がいた。米国が日本を侵略国だと言うならば、ペリーを連れてこいと、日本は三百年の間、外国の土地は不用だ不用だと鎖国して来たのに、自分達のやり方に組せ組せと、開国を迫り、皆さんの仲間になつた。なつた以上お手本通り世界の経済の中で生きて行くことになる。負けてられないじゃないか、君達をお手本としてきたじゃないか、と。社会党の非武装中立も、外国に攻められたら逃げればよいという若者達も三百年続いた戦争のない時代をお手本としているかもしれないが、北方領土はとられっぱなしだが、北方領土はとられっぱなしだ。信淵大人の日常生活は、時に大名の講師として招かれたりした時は、経済的に多少ゆつたりした時も僅かにあるが、医者として特に流行つたという史料はみえないし、百姓をして地主になつたこともない。生存中は数回も火災に遭い、藩に

仕えたこともない浪人ぐらしである。著書を書写しては売って生活してもいたが、それをとやかく評して、得意な意見として活字に迄している大学教授もおれば著述家もいる。著作権のない時代を、自分では年俸と印税の上に安座して批評している。自著のPRは大々的に出しながら、大人が自著の中で自己PRをしたからとて、たかが自著のしかも出版もしない書写しで伝わる本の中でだ。

まあ昔の話だからやめにしても、先日彌高神社から着便した両大人の最近の諸論文目録に「過激な行政改革者佐藤信淵」という論考があつた。筆者も知らないし論文もみてはいないが、現在の行政改革にひっかけた論文ではないかと思う。大人の行政改革意見は、その種本は中国の「書経」によるもので、それをクーデターを起こしても断行しようとするものではない。大人の意見は、幕府政治をどのようにに破つてどんな手順で改革するといった事は何一つ述べてはいない。いわば一つの夢物語を書いてあるもので、私はいつも思うのだが、小説として書けばよかったのにと思われてならない。「過激な行

政改革者」であつた信淵大人の出来事では、果たしてほんとか断定は出来ないが、津山藩での十代末の「行政改革秘話」に述べられてゐる一種のクーデターの行為であるが、こんな事実があつたことは認められるも、大人の問題となる行政改革意見は、一浪人の一学者の意見であつて、改革者と題するのは不当ではないかとみられる。

横道へそれてしまつてゐるが、

大人の老年期は、若い時以上に萌えるような皇国護持論者であつた。

そして過半数以上の著述は皆六十、八十迄、特に七十以後のものであつた。しかも故紙をべたべたはりつけて、文字は全部毛筆の階書、ほとんどくずし字もなく、大きな文字で書いてゐる。老眼の我々には、そして昔の記録のような古文書学の世話にもならなくてすむ著書であり、しかもその全部が秋田図書館にそろつてゐる。こんな環境にある秋田人である。老人学級のテキストにならもってこいだが、どうだろう一つ大人の本を一読してみたら。私ももう七十になつてしまつたが、我々凡人は、四十年かかつて大人の腹中の片側をも泳げない。せめて両大人の願う

「日の丸」の旗でも、祭日位には

子や孫が何とみようと、高々と掲げたら、事実戦後の日の丸ですでに三十年、日の丸の立つ日でない日は一日もなかったはずだ。オリンピックに、祭日のおやすみに、入学式に卒業式に、何一つ楽しくない日はなかったではないか。仮りに戦中のいやな思い出といつても、三十年も続いてはいなかった。

しかも今の子供達は、日教組の教師達から教えられての日の丸アレルギーだ。教師達がいやなのはわからぬでもないが、子供達が生まれてこの方、何のいやな思い出もないその経験を、教師の一方的経験で左右してはいけない。子供の経験を育てるのが大人の役だ。せめて秋田の老人達よ、今更何と言われようと、これから面目をとりもどすこともないはずだ。家庭の中では好々爺であるべきだが、社会的問題に對した時は、日の丸を高々と掲げ、朝日に手を合わせる日本人の姿勢を、両大人と共に生きぬきたいものである。

福祉、どけどけ戦車が通る。と、聞いたことがあるが、国が存在しての福祉ではなからうか。難民となつた日本人を、どこの国が助けて

くれよう。何千万人となく外国観光旅行をし、カメラさげて時計をはめて、うらやまればなしで、日本の経済力を世界の民衆にみせてしまつた日本人である。福祉は日本国あつてのものだことは火を見るより明らかな事だ。せめて日

の丸をたてるそのことが、両大人の「皇国護持史観」をうけつぐ、我々に出来ることだと私は思つてゐる。

(本所研究調査員)

平田篤胤大人を奉斎する神社

紹介

■ 平田神社

東京都渋谷区代々木三丁目

八番十号代々木駅より一軒

祭神 平田篤胤大人命

社殿 三坪位 社務所 二十八坪

境内 二〇七坪九十三 例祭日

十一月三日 宮司鎌田純一 責任

役員平田家後裔米田勝安 社守小

木光良

由緒沿革 明治八年平田鎮胤、

東京本所柳島横川町十一番地に邸

内社として平田神社創建。明治十

六年小石川第六天町十七番地に平

田家転宅の際、宗教法人平田神社

創建。昭和二十年五月二十五日大

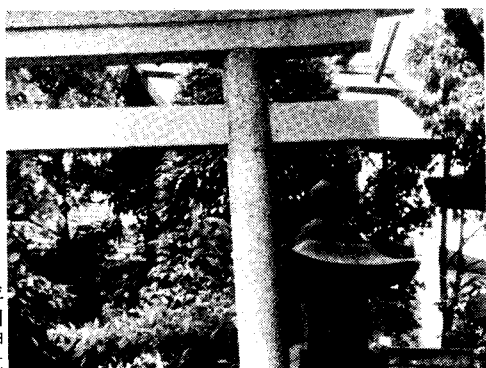
東亜戦争下空襲により焼失、後地

下鉄用地収用の為昭和三十三年平

田邸渋谷区代々木三丁目八番地に

移転、邸内社として新築。昭和四十八年八月二十三日宗教法人として認証された。

(谷野研究調査員)



平田神社

■ 秀枝神社

全国で最初に平田篤胤大人を祀る神社を創建したのがこの秀枝神社である。現埼玉県所沢市下新井の桜木神社境内社として祀られた。桜木神社は「神社明細帳」に依ると、

桜木神社

祭神 秋津彦美豆桜根大人命

(通称本居宣長翁霊)

副祭 贈大納言源義公命 (通

称徳川光圀卿霊)

由緒 嘉永三戌年三月七日伊

勢国本居宣長翁没シテ五

十回辰ニ当ルトキ当村平

民森田七郎左衛門宣長翁

ノ国家ニ大ナル功績アル

ヲ以テ之ヲ首宰トシ且源

義公モ国家ニ功績大ナル

ヲ以テ互ニ神徳ヲ賛ケン

ガタメ副祭シ信仰ノ厚キ

ヨリ当社ヲ創立ス依テ土

人此所ヲ称シテ本居山ト

云フ其後同志輩日ヲ逐フ

テ多ク今日ノ形勢ニ至レ

リ

明治十三年八月二十五日

共有公称許可

社殿 本殿

境内 百五十六坪

崇敬者 五十人

とある。この本社格である桜木

神社は、古学に思慕し本居宣長を

尊信私淑後に平田門に入った森

田七郎左衛門道依が創祀したもの

で、近郊近在では学門様として親

しまれてきた。桜木神社の三上宮

司の所蔵する祝詞の中に「嘉永三

年八月生日創祭」森田七郎左衛門

屋鋪鎮守」本居宣長大人霊神勧請

祝詞」というのがある。これに依

れば嘉永三年の八月の勧請となる

訳だが明細帳他資料の同年三月と

は五ヶ月の沿りがある。嘉永三年

の鎮祭には間違いないにしても、

月日には些か疑問が残る。後日の

考究としたい。

さて、その境内神社に平田篤胤

を祀るに至ったのは十二年後であ

る。同明細帳には、

秀枝神社

祭神 神霊真柱大人命 通称

平田篤胤翁霊

副祭 水月庵服部大人命 通

称服部中庸翁霊

由緒 当社ノ祭神平田翁ハ本

社祭神ノ教子ナルヲ以テ

文久元酉年三月本社ノ撰

社トシテ創立ス 服部翁

ハ道ノ本首ヲ当社ノ神ヘ

伝ヘタルヲ以テ副祭シテ

当社ノ神徳ヲ賛ス

社殿 右祠

とある。秀枝神社が境内撰社と

して創祀されたこの文久元年の三

月には同時に、

本根神社

祭神 羽倉東磨翁霊

岡部真淵翁霊

下川契冲翁霊

宇彌之子神社

祭神 本居大平翁霊

本居春庭翁霊

本居内遠翁霊

篤志神社

祭神 山崎敬義翁霊

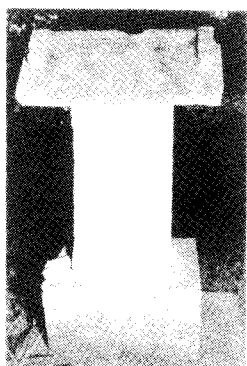
栗山愿大人霊

多田義俊翁霊

の三社、合わせて四社を祀った。

いずれも石祀である。

(斎藤研究員)



秀枝神社

■ 玉鉾神社

篤胤大人の夫人織瀬の出身地で

ある駿府(静岡市)には門人等が

多くいた。文化八年一〇月にはそ

の門人等の招請をうけて駿府に赴

き、翌年の正月まで滞在している。

この間、客中であつて『古史成文』

『古史微』の初稿『霊能真柱』の

草稿まで書き上げたという。駿府

はそうした縁のある地で、後明治

九年に皇学所のある浅間神社の

祠堂石川好賢の発議により、駿府

地内の神職有志によって、浅間神

社境内に「玉鉾社」として国学四

大人を勧請したものである。これ

らは『玉鉾神社鎮祭記』として詳

しく記されたものがある。今ここ

に、現社殿前の説明板に記された

略由緒を載せておく。

境内神社 玉鉾神社

祭神 羽倉東磨大人命

岡部真淵大人命

本居宣長大人命

平田篤胤大人命

祭礼 例祭 三月廿九日 月

次祭 毎月廿九日 春

季祭 春分の日 秋季

祭 秋分の日

由緒 当社は国学の祖神たる

四大人を奉斎し、明治九

年三月、静岡県内の神職

有志が官許を得て創立し



玉鉾神社

た。例祭及月次祭には和歌を献詠する習となつてゐる。祭神の遺徳を称え学業成就(受験、進学)の神として広く崇敬されている。

社殿 昭和十五年に紀元二千六百年記念として造営された社殿は、昭和四十九年の七夕豪雨で全壊したため、伊勢の神宮式年遷宮の古材を賜わり、昭和五十二年十一月静岡県内神職の奉賛を得て再建新築された。

本殿仕様Ⅱ一間社流造、素木造、屋根銅板平葺、建坪一・五五坪、桁行六尺、梁間三尺
(笹村研究調査員)

■ 本学神社

旧無格社

長野県下伊那郡高森町山吹六〇一九 市田駅より鎮座地条山平(七二〇メートル)まで三五軒

祭神 荷田宿禰羽倉大人命

加茂県主岡部大人命

秋津彦瑞桜根大人命

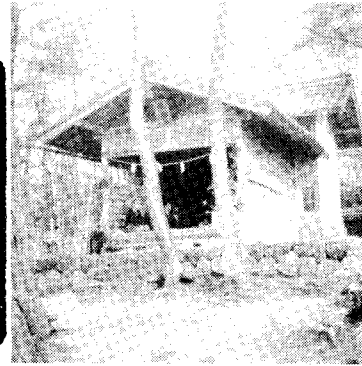
神靈御柱大人命

社殿 越田条山山上松林の中、高さ一メートルに積まれた三メートル四方の石垣上に建てられており、本殿は神明造り。

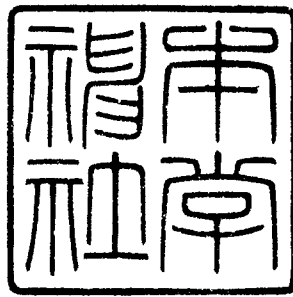
宮司 宮島瑞穂
御霊実(御祭神遺愛品) 古鏡、短刀、古鈴、靈玉・水晶、瑠璃玉。

由緒沿革 伊那谷は江戸時代中期の頃より和歌の盛んな地で平田国学受容の素因があった。歴代山吹藩座光寺氏は文運興隆に力を注ぎ特に片桐春一を中心とした義雄集(まめおのつどい)の読書会が開かれ、平田学徒の真摯なる研鑽の熱意と行動は遂に四大人の遺品の寄進を受けて社殿造営の実現に至った。心労奔走の結果事業は軌道にのり社号も鉄胤により「本学霊社」と命名された。慶応三年三月二十四日全国各地から門人有志

を迎え盛大な鎮座祭が舉行された。昭和三年十二月、片桐寿の主唱により北原阿智之助を中心に神社復興、昭和四十三年十一月創立百年祭を行う。(谷野研究調査員)



本学神社



本学神社印

研究所記事

58・4・19 第一回研究調査委員

会 本所於

4・29・5・7 平田篤胤、

佐藤信淵両大人関係資

料展 彌高神社齋館於 7・14・17 平田篤胤大人を奉斎する全国神社

7・24 佐藤信淵大人オラン

8・1・8・5 平田篤胤大人を奉斎する全国神社

10・27 平田篤胤大人関係遺

10・28・11・7 平田篤胤大人百四拾年式年祭特別

資料展 彌高神社齋館 於

11・1 平田篤胤大人肖像復

59・3・15 第二回研究調査委員 会

新収資料

二柱御神号 平田篤胤筆

伊吹屋大人肖像 医薬神神号 隷書一

和歌 平田篤胤筆 掛軸一

揮発用法秘訣全 佐藤信淵筆 一

天地銘造化育論

上・中・下 版本一

養蚕要記全 版本 一
經濟要録 巻・式・参・
四・五・六・七 版本七

物価余論叢書

上・中・下 版本三

内洋経緯記 版本 一

種樹秘要 版本 一

農政教誡六箇條 版本 一

勤農備要田畯年中行事

全 版本 一

經濟提要 天・地 版本 二

農政本論 初編上・初編中

下中編上中下・後編上中下

版本 四

山相秘録 上・下 版本 二

種樹園法 上・下 版本 二

種樹園法奥秘 版本 一

責難録 上下 版本 二

提防溝洫志一・二・三・四 版本 四

寄贈資料

和歌掛軸

富山市 大和田盛胤氏 一

和歌短冊

秋田市 温故堂氏 一

受贈圖書

国学院大学日本文化研究所

報No.112 No.119 日本文化研究

所紀要 52 No.53 輯

資料

神行之大事

一日ニ三十里モ歩ミテ

疲レス歩飛鳥ノ如シ

一 水銀□一貫目ニ付

一 匁五分ノ割合ニテ其

人ノ身ノ重サヲ計リ

一塊貯フヘシ水銀

ノ下ニ巽ノ字ヲ書キ錦

ノ袋ニ入テ腰ニ下ケル

ナリ

○ 始ニマツ銀□ヲ以テ

宝缶瓶印ニ納メ

ヘチヨ―チユ―クワイ

ロクチャチンカント唱

ヘテ□スヘシ

一 里数之土

三十里余リ遠キ所ノ

土ヲトル上々ノ硫黄ヲ

加ヘテ玉ニ作り麻ノ袋

ニ入レテ臍ニ當テ

腹帯ヲスヘシ

一 縮地之法

白紙ヲ幅七八分ニ切り

長サハ一里一寸ト定メ

三十里行ント思ハバ

三尺ノ長サニ作り是ヲ

三ツニ折テ腹帯ニ入テ

當ルコレ秘傳ナリ三十

里行テ十里ニ縮ムル

術ナリ

一 行衣之法

六月土用ニ薄絹ニ

陽起石ヲ清水ニテ

スリ合セ能々ヌリ付テ

是ヲ七月七日ニ裁テ

縫ヒ銀箔ヲ以テ右ノ

ツマニ車ノ字ヲカキ左ノ

ツマニ行ノ字ヲ書ベシ

ユキヲ長ク袖ヲ大キニ

長ヲ短クスベシサテ又

羽織ノ如クニ胸ニ紐ヲ付

ベシヒボハ新麻ナリ

右ハ風ヲ掛ケ道ヲ行

キ坂ヲ上リ又下リ万事

表裏ニコレヲ用フ高

峯ヨリ落タリトモ自身

痛ムコトナシ亦道ヲ行ク

モ二十里三十里ハ何ノ
事モナシ

一 胸帯之事

乳ノ上ニスベシ

一 キンカク之事

ワラニテ作り褌ニアテ

テ強クスベシ

一 草鞋之事

乳ヲ一ツ放チテ耳ヲ

通スベシ

一 両便ヲシテ後ニ食事

常ノ如クスベシ

一 麻ノ實少シ炒テ置キ

食後ニ三粒ホド湯マタ

水ニテ吞下スヘシ飢ズ

且ツ身ヲ輕クス

一 真草行之事

高キニ上ル坂ヲ下ルト

地ヲ行トノ足ヅカヒナリ

註 秋田市高堂氏所蔵。高堂氏

は門人帳に名前は見え無いが
鉄胤の書簡が多数ある。

本文は篤胤が文政七年に板
倉織部佑に宛たものの写しで
ある。

刊 後 録

研究所報発行まで約一年が経っ
た。この間どのような形で出すか、

どういうもの出すのか、様々な検
討が重ねられ、ようやく刊行する
ことが出来た。今後はこれを土台
として、広く学術の一端にでも寄

与出来ればと考えている。今後の
御指導をお願い申し上げる次第で
ある。
(壽)